

# ホトトギス

八月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日開始発行  
昭和三十一年十月十日第三種郵便物認可  
平成二十一年八月一日発行 第四百十二巻第八号



## 俳句随想 〔三百二十六〕

汀子

「天地有情」の投句用紙の裏の通信欄に次のことが書かれてあった。「表現を平明にする推敲についてお話し下さい」とある。

俳句の勉強は一日で成るものではない。季題の勉強、日本語の表現の追求に真面目に取り組んでいるうちに自ずからよい句が作れるようになって行くものである。

中でも省略を心掛けることは多くの人に実践して頂きたい必須の課題である。自分の作った一句を発表する前に、無駄な言葉がないかよく吟味する。一句中の或る言葉を省いてみて意味が通じるようであればそれは無駄な言葉と考えた方がよい。次に省けない言葉であってもそれをもっと適切でやさしく分かりやすい言葉に置きかえることは出来ないか吟味する。次に全体の構造を考えて出来るだけ平明な構文を心掛ける。更に、てにをはの助詞をこれでよいか吟味して、最後に言いたい事がこれで読者に通じるかどうか考える。

以上は私がいつもしている推敲の方法である。平明は平凡ではないことを推敲の基本と考えて欲しい。

# 句日記 汀子

平成二十年八月二日野分会夏行一日目

今一度逢ひたき人よ露踏みて  
皆一つ齡を重ねてぬし晩夏  
香水の一滴 旅路はじまれり

八月三日 野分会夏行一日目

昼寝などしては旅路の無駄遣ひ  
日盛を怖れぬ若さ出て行きぬ  
この辺り都心の外れ夜の秋

八月四日 ロイヤル俳壇

切替へて晩夏の旅の帰路となる  
満ちゆける空に道あり盆の月  
次々とこなす予定も晩夏かな  
健康は授るものよ夏深し

八月九日 東海ホトトギス俳句大会前日句会

涼しげに語る鶴匠の目のやさし  
造り滝正面に見る席なりし  
迫りくる締切時間汗しとど  
盆休混雑と知るまでのこと

八月十日 東海ホトトギス俳句大会

上流の夕立下流の色となる  
新秋といへば 諾ふ風の道

八月十二日 大阪倶楽部

新涼と思へば豊かなる旅路  
その中に聞きとどめたる法師蟬  
新涼と思ひ返して風の道  
旅心とは新涼のあつてこそ  
早々と墓参すませし旅支度

八月十二日 綿業倶楽部

旅がちに文月十日も過ぎてをり  
山荘の蝸にして名残あり  
風音となりて 蝸遠ざかる  
しみじみと一人の家居文月かな

八月十四日 清交社

この空のいづこに星の流れしや  
新涼の風の道筋ある家居  
設営は簡単にして秋らしく  
旅館は盆休かと問はれけり

新涼の句ふイタリアにんじん木  
会場に新涼の風ゆき渡る

八月十六日 下萌句会

新涼の風の順路に従ひぬ  
一天の星を呑み込み盆の月  
影踏み新涼の風纏ひけり  
影せものにこだはつてぬし生身魂  
誰も居ぬ線香花火の残さるる

八月十九日 有恒倶楽部

講義まづ夜空語らん星月夜  
殊の外残暑厳しと追伸に  
南瓜煮てすぐに供さぬ隠し味  
朝の間の新涼使ひ済ますこと

一と雨に托す残暑でありしこと  
八月十九日 無名会

秋めくといふも朝の間だけのこと  
通かより見て稲妻でありしかな  
秋めくや旅の用意は簡単に  
稲妻や明日へ持ち越す稿多数  
癒えられし人に秋めく日となりぬ  
健康を取戻したる人の秋  
六甲の稜線 浮きて稲の殿

八月二十日 夏潮句会

多勢の会待ち西瓜切ることに  
新涼の風に従ふ葉の順序  
風そよぐとき新涼の庭となる  
文月の蜂の巢退治とはなりぬ  
みどりごの熟寝をさそふ風の秋

新涼の風に乗り来しみどりごよ

八月二十三日 東北ホトトギス俳句大会前日句会

みちのくの大地の秋へ踏み入りぬ  
ひと巡りする間も進む薄紅葉

八月二十四日 東北ホトトギス俳句大会

山の雨とは露けしや光堂  
爽やかに濡れ目的を果したる  
しとど濡れ歩くほかなき秋山路

八月二十九日 時雨会

消してゆく闇の大きき流れ星  
西瓜切る会の人数揃ひけり  
雨消してくれる残暑の二三日  
雲湧きて湧きて残暑を去らしめず

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十年八月四日 はせを句会

君の香と扇の風を送りくれ  
はんなりと来てつと消えし団扇風

八月六日 一水会

日盛に集ひし明治ありにけり  
キールロワイヤルに始まる夏料理

八月七日 蕉心会

丸ビルの玻璃より秋の来りけり  
秋めいてゐるのは君の頭だけ  
片陰に下町といふ広さあり  
今朝の秋雲微笑んでをりにけり  
立秋といふ冗談は止めてんか  
君の目と炎天によるめいてをり  
片陰と十円玉を拾ひけり  
きちかうの向きを正して供華となす

八月九日 東海ホトトギス俳句大会

疲鵜に昼の表情ありにけり  
東京の残暑は置いて来たけれど  
磴険し涼し国盗り物語

八月十一日 朝日カルチャー若草句会

秋めくと思へば都心それなりに  
天の川やつぱり君と見ることに  
鳥高く人間疾く秋めける

八月十二日 「俳句α」出句

世襲てふ鵜川を統べるをとこかな  
篝火の膨れ鵜舟の滑り出す  
宮内庁職員持てる鵜松明  
鵜遣に一縷の迷ひ断ちにけり  
鵜簞に明かされてゆく哀史かな  
鵜匠立つ川の機嫌を知り尽し  
水の黙破り初めたる荒鵜かな  
疲鵜に水との対話ありにけり  
愛の鞭めきて鵜縄でありにけり  
鵜飼果て水は緊張解きにけり

八月十四日 土筆会

初嵐山染め上げてゆきにけり  
手花火に闇の歪んでをりにけり  
子等の輪を狭め手花火果てにけり  
子等の夢線香花火に膨らめり

八月十九日 草木瓜会

長良川水嵩増して初嵐  
初嵐めく丸ビルの角辺り  
稲の花自給自足の出来ぬ国  
稲の花雀素通りして行けり

六甲の山並み統べて初嵐  
八月二十一日 登高会

爆竹の海を精霊舟行けり  
白く現れ黒く降り立つがちがらす  
ベネチアングラス新豆腐の玉座  
星屑を散らし鵲飛び立てり

八月二十三、二十四日 東北ホトトギス俳句大会

爽やかに九郎判官偲ぶ句碑  
邯鄲や堂跡ばかり目立つ苑  
秋霖や黄金といふ夢の色

八月二十六日 若水句会

花茗荷こども離農をせし昔  
富士よりの風は都心に秋めける  
髪の毛の量秋めいてきたりけり  
花つけて茗荷の主張始まり

八月二十七日 目黒学園句会

鬼灯を鳴らし前世のことをふと  
秋扇てふ新しき風生る  
鯛に明日の太陽確とあり  
鬼灯に数十年を引き寄せて  
秋扇要疲れてをりにけり  
鯛に山気吸ひ寄せられてをり  
赤城山持ち上げてゐる秋の雲

八月三十一日 夢三忌前日句会

# 雑詠

## 廣太郎 選

この花に会ひたくて来し吉野山 京都 安原 葉  
 はじまりし句碑の春秋祝ぐ桜 同  
 谷の夜をわたる吉野の月朧 八尾 岩垣子 鹿  
 明けてゆく山が桜を大きくす 同  
 散ることを忘れてをりし花ばかり 同  
 おぼろ夜や花咲爺とすれ違ふ 同  
 散る花に日和つづきの軽さあり 榎原 稲岡 長  
 花の句碑落花の渦もたしかめよ 同  
 巖かに全山の花黙したる 同  
 のどけしや雲が突然雲を吐く 香川 湯川 雅  
 豌豆の蔓の迷へば花迷ふ 同  
 近道を来て野に遊ぶ遠回り 同  
 風といふものに間のあり花吹雪 熱海 嶋田 一步  
 極まりし重さに落花はじまりし 同  
 散るといふ大事なことをして桜 同  
 花人の帰路にアメ横ありて混む 同  
 動物園めざす父と子朝桜 同  
 野遊やパパと呼ばれし人若し 同

山風にまだ臆病な辛夷の芽 神戸 山田 弘子  
 鳥雲に虚子館資料ひんがしへ 同  
 初花の一気といへる鼓動かな 同  
 原爆のがれし雛のおまなざし 福山 竹下 陶子  
 九十五の刀自の手をとり雛祭 同  
 思羽の彩に現れ恋心 同  
 散るといふ程ではなくて散るさくら 八尾 山下 美典  
 昂りの薄れてゆける花疲 同  
 艶やかで重たき色の八重桜 同  
 春の雨バスストップのセニョリータ 大阪 佐土井 智津子  
 ストロウの春潮の色上がりくる 同  
 アッシジの空の広さへ鳥帰る 同  
 ぼつぼつと狭庭の手入れ暮遅し 福岡 松尾 緑富  
 店頭で春呼ぶ餅の数々を 同  
 春雨の風を伴ふ音立てて 同  
 この風が春一番と云へる橋 たつの 浅井 青陽子  
 小城下もこの梅園もわが市域 同  
 春水に沿ひ往く何も彼も忘れ 同  
 水の春人侍める辺りより 龍ヶ崎 今橋 眞理子  
 力ふと抜けたる沼や鳥帰る 同  
 ものの芽や庭の時間の過ぎ易く 同  
 花散るや惑星あまたありながら 東京 橋本 くに彦  
 花散るや次咲くまでの待ち時間 同  
 みちのくの旅情にありぬ花辛夷 同

## 雑詠句評（七月号より）

静龍・保佳・憲明  
とほ歩・中正・千鶴子  
むつみ・葉美奇  
芳子・眞理子・廣太郎

### 卒業の日のお天気もまだ記憶 たつの 浅井青陽子

卒業というのは誰しも持っている人生の節目である。学生時代の苦楽を共にした友人との別れと、指導を受けた恩師からの巣立ち。疎遠であっても会えば昨日も会ったような気持ちになる友もいれば、近くに居ても言葉もかけずに過ごしている友もいるし鬼籍に入った友も居る。どの友とも共通の話題で、作者が今に忘れることの無いのは卒業式の時の天候である。卒業歌でよく歌われる「蛍の光窓の雪」の歌詞のような春の雪の降った日もあるのであらうか。又、小学校から大学卒業まで全ての式の日の天候を覚えておられるのかもしれない。読者にいろいろとお天気を推測させつつ、ご長寿の作者が卒業日のことを思い出しながら自らを存間する御句である。（静龍）

この方にこう言われると筆者は恥ずかしい限りで、小学校から大学までの卒業式の日の天気は全く覚えていない。それだけ感動的な思い出だったのか、とも思うが、季題として考えてみると確かにこの日は晴れ舞台で、何時までも思い出に残るイベントなのである、という事をあらためて教えられた。（廣太郎）

### 著ぶくれし人枱席をはみ出しぬ 神戸 涌羅由美

著ぶくれの人の集っている枱席といえ、芝居小屋や歌舞伎もあるが大相撲の枱席のような気がする。

著ぶくれという多少ユーモラスな季題から考えると、これは多分相撲の枱席のことだと思われる。

丸みを帯びた著ぶくれの人の姿と、きつちりと直線で仕切られた枱席との対比が何か面白い、この句はその肥った著ぶくれの体が枱席を思わずはみ出したというところに焦点をしばってその枱席の雰囲気、興奮の有様まで感じられるところが面白い。

諧謔味のある一句と言えよう。（保佳）

平成二十一年初場所に、筆者は生れて初めて両国国技館へ大相撲を見に行った。この句のように枱席は思った程大きくはなく、四人が座ると一杯である。そこで酒盛りもするわけで、本当に舞めき合っていた記憶がある。この句も国技館であらうか。季題が見事に納まっている。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

花子選

みよし野の花へ一 駆づつ 停車  
 過ぎゆくは時のみならず散る桜  
 風柔らかくやはらかく初音聞く  
 波稜草湯気まで染めて茹で上る  
 み吉野の旅の期待を語る花  
 明けそめてはや花人を迎ふ山  
 散る花のそのひと片の軽さかな  
 闇に立つ巨き桜の息づかな  
 奈良朝の花のうてなに吾在りぬ  
 天地も俳句も枯れし思ひかな  
 きさらぎの煌めきに立つ富岳かな  
 一對の立雛に足る山盧かな  
 春二月英訳なりし虚子百句  
 日本を明るうしたる初桜  
 宵と夜のあはひに沈みゆく桜  
 句碑目覚む花の散り込むその谷に  
 ひばり野といへば富士見にゆくことに  
 花辛夷白をつらぬききつて落つ

東京 今井千鶴子  
 同 稲畑廣太郎  
 同 京都 安原 葉  
 同 榎原 稲岡 長  
 同 豊中 瀧 青佳  
 同 小金井 武井良平  
 同 吹田 宮崎 正  
 同 神戸 長山あや  
 同 熱海 嶋田 一步  
 同

留守にせし家の春寒しぶとかり  
 炬燵して入りても出ても一人の日  
 月出づと揺れしづまりし桜かな  
 濃むらさきうすむらさきの夕桜  
 蛇穴を出て子規の風虚子の風  
 癒さるる大地のことば犬ふぐり  
 永き日の二つの庭を往き来して  
 春落葉うたふごとくに降ることよ  
 替へて来て嘘つきさうな鷲の口  
 美しく描きすぎ寒き殉教図  
 たつぷりと雨の重たき花ミモザ  
 路地曲る風の明るさ花ミモザ  
 夜遊びは涼しき佐比売星を見に  
 佐比売星見に来蛸の飛ばうとは  
 ゆたかなるこゝろに副ひし露の臺  
 童心のむかしのまゝに雛流す  
 百年の桜見てをるわが齢  
 野の市に影は落さず春の雲

同 嶋田摩耶子  
 同 神戸 三村純也  
 同 同 山田弘子  
 同 明石 中杉隆世  
 同 神戸 後藤比奈夫  
 同 東京 河野美奇  
 同 福山 竹下陶子  
 同 浅井青陽子  
 同 徳島 上崎暮潮  
 同

# 天地有情句評

## 汀子

桜の息遣いを闇にも感じる詩心。

奈良朝の花のうてなに吾在りぬ 豊中 瀧 青佳

極楽浄土と詩の世界の接点。

みよし野の花へ一駅づつ停車 東京 今井千鶴子

きさらぎの煌めきに立つ富岳かな 小金井 武井良平

花への期待も一駅づつ膨らむ。

ようやく富士山の雪解けの煌きに出会う頃。

風柔らかくやはらかに初音聞く 東京 稲畑廣太郎

春二月英訳なりし虚子百句 吹田 宮崎 正

自然との存問。

「虚子百句」の英訳完成の慶びの二月。

み吉野の旅の期待を語る花 京都 安原 葉

宵と夜のあはひに沈みゆく桜 神戸 長山あや

吉野山の花との出会いへの期待。

刻々と暮れゆく夜の桜。

闇に立つ巨き桜の息づかひ 榎原 稲岡 長

(以下略)